

**募金目標達成まであと28万円！…到達272万円（4/28現在、目標300万円）****～ニュースNO17の到達295万円は集計ミスです。訂正しお詫びします～**

これまで寄せられた募金は100万円を全日本民医連、100万円を医療福祉生協連合会に送金しました。全日本民医連では第1次分として岩手県、大船渡市、陸前高田市、宮城県、東松島市、七ヶ浜町、多賀城市、塩釜市、仙台市、山元町、柴田町、福島県、福島市、いわき市、飯舘村、川俣町の県・自治体に義捐金をお渡ししました。また医療福祉生協連合会も岩手県、宮城県、東松島市、柴田町、福島県、福島市、いわき市、郡山市に義捐金をお渡ししました。

**～全日本民医連の募金の使い方～（全日本民医連4月理事会で確認）**

- ①被災した各県の「義捐金配分委員会」を通じて被災者に直接お届けする。
- ②被災した自治体（この間の支援活動で関わりの深い自治体）にお届けし、復興に役立てていただく
- ③被災した加盟事業所の復興に役立てていただく
- ④支援物資などの購入に役立てる（全日本民医連が緊急に購入した医薬品など）

**※なお支援に関わって生じている交通費（支援バスのチャーター費用など）や宿泊費などは、義捐金の活用でなく全日本民医連の費用とします。同様に富山民医連が送った救援物資の費用や支援者派遣費用は富山民医連の費用でだしています。（募金を使っていません）**

★宮城民医連の宮城厚生協会だけでも、倒壊した長町クリニックの解体作業に1億3000万円、他事業所の被災建物応急修理だけで6000万円かかるそうです。被災事業所の復興支援も重要です。

**第10次支援チーム、長谷川俊一さん(富山協立病院・理学療法士)からの報告です**

<一緒に支援したセラピスト仲間>

これまでの先輩支援者と同様に拠点は宮城県塩釜市「坂総合病院」でした。移動日を抜いた3日間の支援場所は病院から徒歩10分の「多賀城市総合体育館」でした。現在でも400人くらいの被災者が非難しています。しかし、日中は100人ほどで、仕事に復帰された方や家の片付けをしている方が多く、高齢者が多く残っている印象を受けました。避難者の居住スペースはダンボールで囲まれているものの、上からは丸見えでプライバシーは保たれていませんでした。食事は三度提供されますが、炭水化物や嗜好品（お菓子など）が多く、パン地獄と声を上げる避難者もおられました。それに加え、冷蔵庫がないことにより提供された物資の管理も出来ない状況でした。

4月からRチーム(Rehabilitation-team)が発足し、坂病院のリハ医と現地OTが避難者を巡回しながら、リハビリが必要な方のピックアップを実施していました。私の3日間の役目は、そのカルテをもとにPTとして個別リハを支援することでした。支援の中で特に印象的だったのが、脱水・血糖コントロール不良・高血圧、さらに認知症や精神障害など医学的管理やこころのケアの重要性です。さらに、介護サービス等の利用もまだまだ復旧しておらず、デイに行けない、貸与されていたベッドもないし杖もないから寝たきりになったなど、ケアマネの確認や福祉用具の貸与も難渋している様子でした。

以上の様に、被災地では職種の壁を越えた必要性が求められ、チームとしての連携の重要性を感じました。

## 第9次支援チーム栃折・高野さんの感想

～その1～

(高野さんの感想文はニュースNo19で掲載)



### 七ヶ浜の被災した様子

写真提供：長谷川俊一氏  
(協立病院リハビリ科)

4月11日～4月16日 宮城県塩竈市「坂総合病院」に支援にいきました。

坂総合病院本部のスタッフの方から、夕方のミーティングの前に津波被害のひどかった七ヶ浜を見学にいったらどうかと言われました。その時は、十分テレビの報道で見ているし、観光にきているのではないので見学するという事に抵抗がありました。でも実際に目にして、この青い穏やかな海が一瞬のうちに荒れ狂いすべてをさらって地獄絵となった風景を目にした時、胸がしめつけられました。

避難所訪問をさせていただきました。日中は仕事に出かけている方も多かったですが、高齢者の方が血圧測定をしに来られたり、診察に来られたりしました。避難所の体育館はとても乾燥しているらしく、咽頭痛や咳が止まらなると診察にこられ、「周りの人に咳の音で迷惑がかかるので咳を止めたい」と薬の処方希望される人が多かったです。

心のケア専門で避難所訪問をされている看護師さんから聞いた話によると、ある女性が「何が頑張れですか。何をどう頑張るんですか。涙なんて出ません。一瞬のうちに自分の生活が変わってしまい、これからどうしていったらいいのか」と話しをされた。その話を聞いた時、どうしてあげることがその人にとっていいのかわからず自分の無力さを痛感しました。とにかく早く復興にむけて力を注がないといけないと思いました。

体育館で生活しておられる方々に、どんなあたたかい毛布を渡そうか、食事を分配しようか、元の生活に少しでも早く戻ることが出来るようにしてあげることが何よりの支援だと思います。行政や国の対応の遅れに苛立ちますが、自分はこれからどのようにかわり、ともに痛みを感じ共に強く生きていかなければならないと感じました。

被災された方からいろいろな話を聞き、逆に勇気づけられることもありました。ある男性は「もう怖いものなんて何もない。どんな事にも耐えられる」と話されました。今、自分たちに出来ることを小さな事からでも始め、笑顔で生活できる日に向けて前進していきたいと思います。

富山協立病院・南2階病棟 栃折規子

# 東日本大震災チャリティバザー

5月11日(水)10時～12時

富山協立病院自転車小屋前(雨天決行)